い學者であり、その廣大和本草は評判のよくない書物であるが、同書についてはつぎのやうな事實が記してある。「この書について奇談あり。もと書林よりのあつらへものなるを打捨おける折しも、わが女の緣談極まり、明日いづれ金子入用のことある故、願主の書林へ行、金子借用のこと賴みければ、書林いはく、あつらへの品出來にて御持參ならば御用立べし。左なくて叶ひがたしと云。よつてその夜一夜の中に全部書立、明日持行、金子うけとりしと云。その秀才知べし。たとへ杜撰なりとも、かく大業の物を一夜の中に卒業なしつること恐るべしと云。」" 倘杉野氏ノ稿本ニヨツテ例ノ百珍本ノ一デアル豆腐百珍、及同後篇ノ著者ハ曾谷學川ナル篆刻家デアツタコトガ判ツタ由デアル。學川ハ便覽ニヨルト「性溫順謙遜にしてよく人と相和す。頗る酒をたのしみ、醉ば則新聲を發す。豆腐を好みて工みに煮分くるを樂みとす。其雅趣いふべからず」ト言フ。

○はすのはぎり屬ノ葉ニ就テ (津山 尙)

はすのはぎり屬 (*Hernandia*) ハ典型的ノ全緣葉ヲ有スルト信ジラレテキルガソレハ本來ハ掌狀裂葉ノモノデアルラシイ。だんかうばいヤしろもじニ全緣葉ノモノカラ三裂葉ノモノマデガアルコトハ既ニ久内淸孝氏ガ本誌 3 卷 267-269 頁ニ報告サレタ通リデアル。前者ニハ時ニ五裂葉サヘ生ズルコトガアル。はすのはぎりニ於ケル例モコレニ多少似タ場合デアルト考ヘラレル。ニューギニアノ鳥頭半島ノプラフィ川地方ノ降雨林中デ採集シタ同屬ノ標本 (Aff. *Hernandia ovigera*) ハ 3—5 裂スル葉ヲ有シテキル。尤モコレハ幼樹ニ限ル樣デアル。同地方ノ別ノ部分デモ亦同樣ノ標本ヲ得タカラ、コレハ畸型的ノモノトハ考ヘラレナイ。一般ニ老樹ノモノ程葉ノ裂片ヤ鋸齒ガ不明瞭ニナツテ來ル事實ハ多クノ植物デ見ラレル通リデアル。例ヘバ *Gilibertia* デハ三出葉が全緣ニナルシ、*Ginkgo* ヤ *Bauchinia* デモ亦不明瞭ニナル。もちのき、さかき、やまもがし、やまももノ葉ハ全緣ガ普通デアルが、切株カラノ枝ヤ發育不良ノモノハ鋸齒ガアリ、ひひらぎ、りんぼくノ老樹ノモノハ全緣デアル。コレカラ見ルトだんかうばい、しろもじハ多少異ツタ範疇ニ屬スル。又 *Tilia*, *Pterocarya* 等ノ子葉ニ深イ裂片ガアルノニ普通葉ニソレガナイノモ少シ異ツタ例デアル。

○たこのきノ名ノ起リ (津山 尙)

大東亞戰爭ガ初マツテ以來南方植物ニ對スル一般ノ關心ガトミニ高マツタ。ソノ中デモたこのきト言フ名ハ非常ニ一般化シテ新聞ノ現地報告ヤ隨筆ヤ時ニハ小說ノ中ニサヘ出テクル樣ニナツタ。勿論正シクハたこのきハ小笠原島特產ノ *Pandanus boninensis* WARBURG ニ限ルノデコノコトハ植物學ヲヤル人達ナラ先刻承知シテキルコトデアル。ソレ故南方ノソレハ廣クたこのき屬ヲ指シテキル譯デアル。コノたこのきハ何時誰ニヨツテ名付ケラレタノデアラウカ。*Pandanus* 屬ニ對シテハコレヨリ古ク有名ナ和名ハ多クアツタ筈デアル。日本人ニハ既ニ琉球ノ *Pandanus tectorius* SOLANDER ガ知ラレ、阿咀呢 (アタニ、アダン) 榮蘭 (エラン) ナドノ名デ人口ニ膾炙シテキタノデアル。阿部櫟齋ノ草木

育種後編（天保八年）ニハコノモノノ培養法サヘ出テキル。支那（淸）デハコノ果實ノ分果ハ木生毫（卽チ木ニ生ズル所ノ筆ノ意）ト稱セラレテキタガ、日本デモソノママ文人墨客ノ間ニ通用シ、和名ヲ「アダンフデ」トモ稱シタ。分果ノ基部ノサラサレテササクレタ所ハ實際ニ筆ノ代用トシテ用ヒラレタ。コレニ關シテハ田中芳男氏ガ兩三回詳細ニ書カレタコトガアル。日本人ノコレニ對スル知識ハ當時迄ハ臺灣府志ヤ中山傳信錄等ニヨツタ部分ガ多ク、*Ananas* ヤ *Artocarpus* トノ混同ガ始終起ツテキル。又岩崎灌園ノ本草圖譜ニハ WEINMANN ノ圖ヲヒキウツシテキルガココニ於テモ同樣ノ混同ガ著シイ。たこのきノ名ハ小笠原島ノモノニツケラレタノデアルガ、ハツキリト琉球產ソノ他ノモノト種類ガ異ルト認識シタ上デソウサレタモノデハナイ樣デアル。明治ノ初年ニナツテ初メテ田代安定氏等ガコノ區別點ヲ實際ニ確メテ書イテキル。たこのきノ名ガ初メテ印刷ニナツタノハ「文久壬戌讀書室物產會品目」ナル僅カ 14丁 ノ版物ニ於テデアツタ。コノモノノ初頁ニ「文久二年壬戌五月九日十日平安讀書室物產會品目」トアルカラ恐ラク同年中ニ山本亡羊一派ノ人々ニヨリ出版サレタノデアラウ。ソノ第 6丁 ニ「江戶伊藤圭介　文久二年於無人島所得　林投一名阿咀呢　エラン一名モクアタン　假稱曰タコノキ云丶」トアル。三河西尾ノ岩瀨文庫所藏ノ阿部櫟齋自筆稿本「南嶼產物志」（卽チ小笠原島ノ產物志）中ニハ「タコ小野　ネアガリアダン喜任　ホンジフデ喜任」ト出テ居リ　訂正ノタメ貼紙ヲシタ下ニハ「タコノキ小野」ト讀マレル。喜任ハ櫟齋ノ字デアル。コノ小野氏トハ後ニ博物局ニ勤メタ小野職愨氏ニ他ナラナイノデ、幕府ノ本草家トシテ小笠原島再度ノ開拓ノタメニ水野筑後守等ニ從ツテ渡島シタ時ノ委デアル。コノ事實カラたこのきノ名ハ小野氏ニ發シソノ師伊藤圭介氏ニヨツテ發表サレタコトガ判ル。コノ事實ノ傍證トナルベキモノニ櫟齋ノ「南嶼行記」（卽チ八丈島及ビ小笠原島ノ旅行日記）ガアル。幸ニシテ淸野謙次博士所藏ノ若樹文庫舊藏本寫本ヲ拜見シ得タノデ、ソノ一節ヲ紹介スル。「阿咀泥の實の一ツ一ツ離れたるを曾占春先生より木生毫といふ梵字を書するものなりとて予に贈られしもの、此南嶼（註小笠原島）に產す。小野氏はタコノキと名づけられし。在留の英人はロワラ（註ハワイ語 Lohala, 小笠原島デモ現ニ老人ハルーワラト稱スル。）といふ。これを英書に證するにスクルウ螺旋パイン、ネヂレシュロと譯すべし。その幹(みき)の頭(すへ)の葉の三方に分れねじれたるもの故にスクルウパインと云ふも宜なり。」又「琉球產のものより實やゝ大なり。この樹思ひも寄らぬ所より根を生じ、枝を分ち枝の間に實を生ず。葉は長くねじれるものなり。小野氏のタコノキと名づけられし。この品文政六年癸未の歲に始めて琉球より渡り來れり。これ中山傳信錄の阿咀泥(アダニ)にして臺灣府志の鳳梨(ほうり)、臺灣志略の黃梨なり。予草木育種の後篇に誌せり。予此地に來て始て鳳梨と榮蘭と二種おのおの異れるを知れり。英人のアナナス、一名パインアツプル、和蘭にてアナナスボームと云ふ。鳳梨一名黃梨なり。その熟して黃色なるを食するに柑(みかん)と梨(なし)とを合せ食ふに似たり。これ直に黃梨なるを知れり。謭(みだり)にハマナシ（小野氏）一名シマナシ（阿部）の名を下せり。」（以上適當ニ句讀點ヲ加ヘ文字ヲ少シク變更ス。）コノたこのきノ名ハ博物局ノ田中芳男氏ニ採用サレ、更ニ後ニ大學ノ先生方ニ用ヒラレテ、他ノ和名ヲシノイデ有名ニナツテ來タ樣デアル。チナミニたこのきガ

Pandanaceae ニ對スル科名トシテ最初ニ採用サレタノハ明治十二年五月文部省印行ノ植物綱目（長谷川泰氏原譯）ニ於テデアル。

○晒木綿ヲ使ハズニ海藻ノ標品ヲ作ル方法 (前川文夫)

晒木綿ヲ使フ事ハ海藻標品作製上ハ常識デアリ不可缺ト思ハレテ居ル。(モツトモ上海版ノ周玉田、動植物採集及標本製作法 (民國 25 年) : 170 ニハ須置大玻璃缸中、內置清水使之漂散於白色硬紙上、然後取出平鋪於採集紙中、置於標本夾中緊壓、使其乾燥トアツテ布ヲ使用シナイ者モアル樣デアルガコレハ普通デハナイ)。最近ノ木綿、純綿ハ勿論スフデサヘモ入手難ノ折柄海藻學ノ實習等ニ木綿ノ無イノヲ克服シヤウト次ノ方法ヲ試ミタ。

1) 海藻ヲ淡水中ニ入レテ形ヲ整ヘ、厚紙上ニ展開サセテ靜カニ水カラ上ゲルコト型ノ如クニスル。

2) 新聞紙全紙 8 頁分ヲ重ネテ二ツ折ニシタモノヲ上記標品ノ前後ニ當テガフ。コノ際ニ顯花植物ノ場合ノ如クニ新聞紙 1 頁大ノ二ツ折ノ間ニ挿入スルコトハシナイ。

3) コレヲ重ネテ壓ス。

第 1 日ニハ半日位デコノ新聞紙ヲ取換ヘル。ソレニハ先ヅ上ノ濕ツタ新聞紙ヲ取除キソノ跡ヘ乾イタモノヲ置キ、次ノ濕ツタ新聞紙ト共ニ標品ヲ挿ンダ儘デ上下ヲ裏返シテカラ濕ツタ新聞紙ヲ去リ、更ニ厚紙ヲモ注意シテ取去ル。ソノ跡ヘ乾イタ新聞紙ヲ當テル。コレヲ各標品ニツイテ繰返ス。新聞紙ハ何度モ使用シテ日ニ燒ケテ黃色クナツタモノノ方ガケバ立タナクテヨロシイ。吸取紙ハ纖維ガ體ノ表面上ニ着イテヨゴレルノデ直接ニ當テルコトハ絕對ニイケナイ。第 2 日以下ハ每日 1 回ヅヽ上記ノ方法デ、紙ノ取更ヘヲ實行スル。コノコトハ海藻體ノ脫水乾燥ト新聞紙ヘノ粘着防止トノ二ツノ目的ノタメデアル。上下飜轉ニハ一寸注意ガ要ル。ソレハ乾キカヽルト海藻ガ紙ノ間カラ拔ケテ落チル心配ガアルコトデアル。5-7 日位デ大抵ノモノハ先ヅ乾イテ來ル。後ハ臺紙ヘ添付スルナリ新聞紙ノ間ニ挿ンダ儘デナリ整理保存スル。カウスレバ臺紙付ノモノト同樣ニ或ハ夫レ以上ニ原形ヲ存シ且ツ美シク出來ルシ、標品ノ表裏、厚サ、柔軟サ等ヲ容易ニ見ルコトモ出來ルシ、厚紙ヲ展開用ニ何度モ使用シテ紙ノ節約モ出來ル利點ガアル。三崎デノ採品ヲ用ヒテノ結果デハまめだわらヤがらがらノ如キ紙ニ附キ難クイモノハ勿論申分ナイガ、しきんのり、すぎのり、ふさのり、てんぐさ、とさかのり、たんばのり等ノ紙ニ密ニ粘着スル種類デモ上記ノ方法ニヨレバ充分ニ良イ標品トナル。いぎすノ如キ特ニ纖細ナモノハ從來ノ方法デナイト壞レル心配ガアルガ、先ヅ大抵ノ種類ニハ適用出來ルト思ハレタノデコヽニ述ベテ御參考ニ供スル。